

ここからはこれまでの「日本映画界の五社協定とスタープロの出現」の外伝として書くことにします。

#### ・東映の方向転換

当時観客動員の面、つまり興行的に群を抜いていた東映のことについて述べてみます。当時、東映と松竹は他社と異なり従来通りの制作・配給のシステムの変更を行っていません。ことに東映作品は、ほとんどベストテンに入ることはないのですが、この時代に鶴田浩二、高倉健そして藤純子を中心にした東映任侠映画が数年に渡って華々しい黄金時代を展開します。任侠スターたちの演じる任侠の美学は、当時の学生たちの政治闘争とは無縁ではなく、したがって1970年以降の学生闘争の変化とともに変わる一面を見せます。そして、1973年の笠原和夫脚本・深作欣二監督の『仁義なき戦い』という実録路線へと転換します。その転換の要因は次の三点に集約されるのではないかと考えます。まず、任侠映画というジャンルの制度疲労の問題です。多くの観客を呼び込める土壌が出来上がれば、粗製濫造気味に陥ります。演じる側にもマンネリ感が募り方向性に疑問が生じます。三大スターの疲労度はいかばかりであったでしょうか。しかし、松竹の場合はドル箱としての役割を果たす山田洋次の『男はつらいよ』シリーズはマンネリの典型の作品ですが、マンネリだからこそその安定感と渥美清という俳優の強い個性が発揮できる場として確立しました。次に藤純子の引退という出来事です。従来の様式美を支えてきた華やかさと興行の大きな柱が失われました。笠原和夫脚本・マキノ雅弘監督『関東緋桜一家』でフィナーレを迎えました。そして、三つ目は『ゴッドファーザー』の出現でしょう。1972年に公開された『ゴッドファーザー』は血なまぐさい内部抗争や組織の利権を生々しく描く手法が、東映経営陣の岡田茂やプロデューサーの俊藤浩滋（藤純子の父）たちに強烈な影響を与え、「もはや古い任侠道ではなく、裏社会のリアルな実録を描く時代だ」と確信させました。これは斜陽化した日本映画界にとって大きな事件であり、カンフル剤以上の役割を果たし、以降の多様な日本映画の展開に大きな影響を与えたものと確信します。これは大きな転換点でした。藤純子同様、任侠映画を去る高倉健は新たなキャラクターを見出すことになります。そこで出会ったのは、倉本聰であり森谷司郎であり山田洋次、降旗康男でした。

#### ・勝新太郎とは何だったのか？

勝新太郎のことに触れておきたいのですが、1968年勝プロを設立し、第2作目に選んだ題材は安部公房原作『燃えつきた地図』でした。安部公房自身が脚本も担当し、監督には安部公房と繋がり深い勅使河原宏です。その前の第1作目が、山本薩夫監督を招聘しての『座頭市牢破り』（1967）からすれば意外な選択ともとれるのです。勝プロの旗揚げ作品は、大映京都との共同製作であり、製作には当時の大映社長の永田雅一の名がクレジットされ勝新太郎の名前は出てきません。前年の大映での『白い巨塔』という大ヒット作を発表し高い評価を受けた山本薩夫は、基本的にシンプルな勧善懲悪の座頭市のストーリーに重厚な人間ドラマを描こうとするスタンスが感じられ、これに勝新太郎のアクの強さが加わり座頭市シリーズの第1作目『座頭市物語』（1962年三隅研次監督）に並ぶ名作となります。宮川一夫（撮影）西岡善信（美術）中田源権（照明）といった大映

の第一級のスタッフが顔を揃えたことも大きかったでしょう。勝新太郎の心情を推測するに意欲的で野心に溢れて新たな座頭市像の確立を視野に入れてのことでしょう。

『燃えつきた地図』を見て感じるのは、勝新太郎という古い芸能界・日本映画界の伝統と慣習を背負った大立者が、前衛芸術の洗礼を受けてもがき、暴走するプロセスだということです。勅使河原宏、安部公房、武満徹という当時の前衛芸術の最前線にいる精鋭と勝新太郎の組合せはまるで水と油を思わせませう。安部公房の原作は、『失踪三部作』（『砂の女』『他人の顔』）を構成する一作であり、近年の『箱男』（2024年石井岳龍監督）にも通じる”人間の匿名性”と”終わりになき孤独”が表現されます。勅使河原宏と勝新太郎という異なる映画観を持った二人が円満に治ることはないのであり、うまく進行・展開していたストーリーもラストの勝新太郎の姿を見るとどうしても当惑を覚えてしまいます。感情と存在感の塊で勝新太郎と感情を排したモダンアートの迷宮を描こうとする勅使河原宏の創作との間には齟齬が起きるのも当然のことでしょう。しかし、そこがこの作品の最も惹きつけるところです。魅力なのです。勝新太郎は、『燃えつきた地図』での探偵の役を自らの肉体性の中に落とし込めず、手に負えないことだけを理解したのではないのでしょうか。同時に勅使河原宏から強烈な影響を受けることになったのでは。1970年に勝プロは、定番の座頭市シリーズである『座頭市と用心棒』（岡本喜八監督は、座頭市と三船敏郎演じる用心棒との一騎討ちは果たして観客を唸らせることができたのか？）と『座頭市あばれ火祭り』（三隅研次監督）を発表した後、1971年に勝新太郎の初監督作『顔役』を世に送ります。脚本は菊島隆三と勝新太郎の共作。ここで、勝新太郎は勅使河原宏から受けた影響を素直に勝新太郎流に発揮します。主演である自分を除く登場する俳優の個性や魅力を引き出す演出ではなく、すべての共演者を自分という太陽の周りを回るだけの”景色”に変えてしまいました。勅使河原宏は『燃えつきた地図』の中で、渥美清や市原悦子といった個性の塊のような俳優たちを、まるで都市の背景や記号のように冷たく淡白に切り取られたかのような表現を行いました。これは演出の上で、またカメラ（上原明）が周到に計算した”人間の匿名性”を表現するための高度な芸術的意図であったことは明確に読み取れます。ところが、勝新太郎の映画術は自らの圧倒的な肉体・声・即興のヴァイタリティで周囲を支配しドライブしていくものであって、勅使河原宏と安部公房が用意した人間的な熱量が通用しない”冷徹な記号の迷宮”だったのです。ドキュメンタリー出身の勅使河原宏と抽象的な設定で現実を切り取っていく安部公房の結びつきは、どろどろと錯綜した日常をシュールなタッチで描き出すという奇妙なムードを持つ映像を作り出した『砂の女』（1964）『他人の顔』（1966）から発展と洗練を続けていました。伝統的な技術と破壊的な感覚のぶつかり合いを心情とする勝新太郎の映画術は一部には多くの賛同を得ているのも事実です。『顔役』の冒頭の賭場のシーンでは本物の方々の登場するというこの上ないリアリスティックな表現ではあるものの、垂れ流しの映像の氾濫は全体の作品バランスを壊してしまいます。そして、何とんでも、ラストで感情の昂りを抑えられない勝新太郎演じる刑事が暴力団組長を追い詰めるシーンは、あまりにも感情がエスカレートし大きく現実味を損なう結果となったと思わざるを得ません。これまで、本作の脚本を共作した菊島隆三の作品を何作も読んできた経験から言えば、菊島隆三がこうした結末を書く訳がないと改めて強調したい気持ちが募ります。本作を発表した後、勝プロは深刻な資金不足に陥る

ことになります。当時を回想する記事には「（勝新太郎の）こだわりにより、映画の撮影は予定を大幅にオーバーしました。テストなしの本番一発勝負、即興のセリフ、実験的なカメラワークなどを追求した結果、当初の予算を遥かに超える制作費が投入されました」とあります。一時的にTVでの座頭市で好成績を収めるものの、「良いものを作りたい」という執念から、TVドラマの常識を遥かに超える制作費と時間が費やされました。結果として、稼いだ先から制作費に消えていく自転車操業が続き、抜本的な財務改善には至りませんでした。1981年に約12億円の負債を抱え勝プロは倒産します。倒産後夫人である中村玉緒が「勝プロモーション」を借金返済のために設立し20年かかり返済にこぎつきました。勝新太郎が癌のためこの世を去ったのは1996年7月のことです。映画監督勝新太郎を紹介する滝沢一の文章から抜粋しておきます。「映画監督ではクロード・ルルーシュの作品に最も影響を受け、その即興的演出や流麗な映像表現が、六代目尾上菊五郎の写實的演技のベースとなっている。それが勝新太郎作品の際立った特徴である。なまじ専門監督のルーティン化したものよりおもしろい」

勝新太郎をめぐる映画作品は、代表とされる座頭市シリーズだけではなく、特にこの『燃えつきた地図』『顔役』の二本を見ることで新たな評価へとつながるものと考えられます。これは、勝新太郎への批判ではなく、あくまで日本映画界の大立者である勝新太郎という、心から映画を愛し続けた好漢への哀悼との誠を捧げるためであり、またその心情を正確に理解するための端的な手段だと考えます。

（文中敬称略）